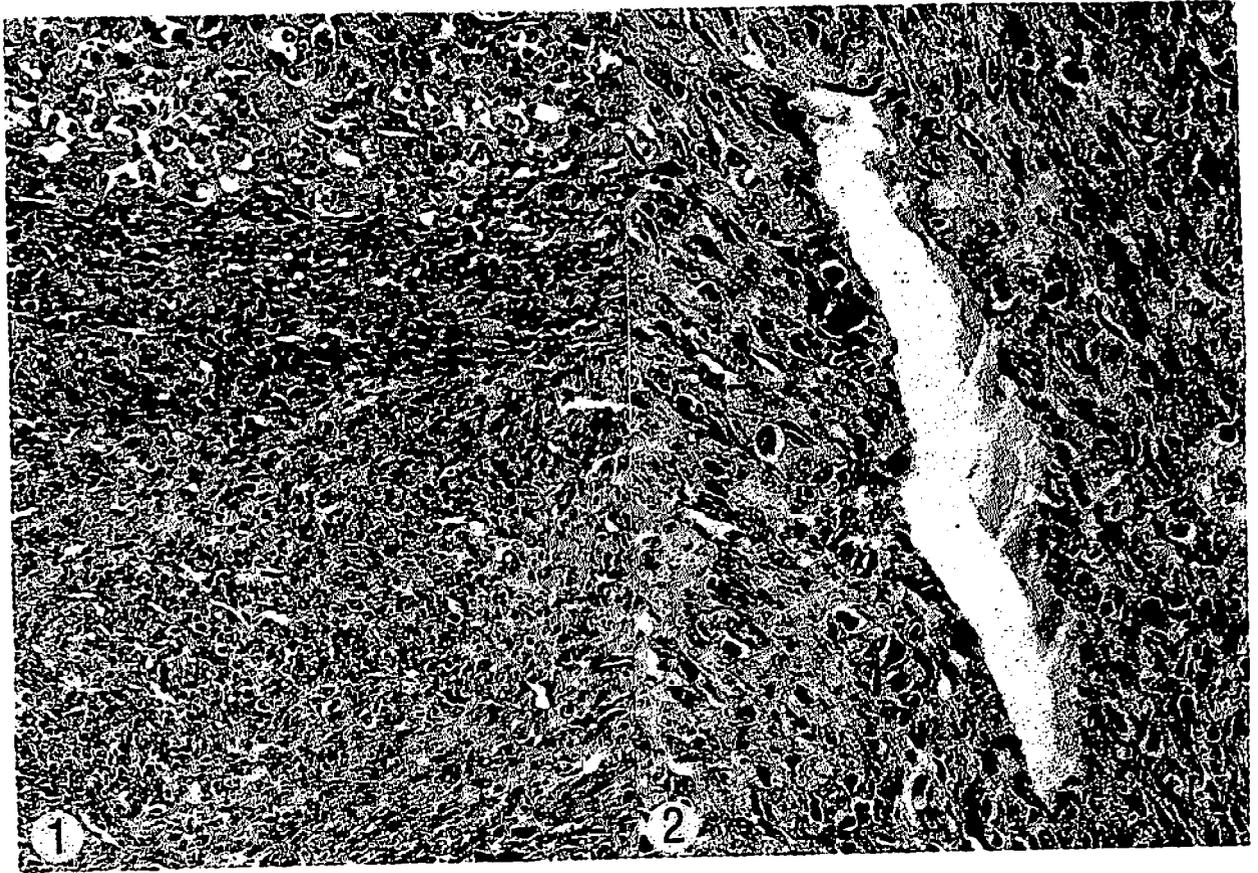


# 犬の足関節の新生物

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.361



**動物種：**犬，ポインター，雄，3才1ヶ月，体重31kg。

**臨床的事項：**約1ヶ月前より左後肢足関節が軽度に腫大・硬結し，跛行が認められた。56年10月21日の来院時に足関節は鶏卵大に腫大し，X線検査では，胫骨遠位端前面に4×2cmの楕円形陰影を認め，この部位の胫骨前面に進行性の骨吸収像を認めた。左後肢筋肉は廃用性に萎縮し，予後不良と判定し断脚した。

**肉眼所見：**腫大した関節部の剖面は，白色充実した組織で，滑膜から直接移行しているように見えた。関節腔は同様の新生物で充たされ，滑液は認められなかった。

**病理組織学的所見：**関節部新生物は紡錘形細胞を主体に構成されていたが，著明に増生した結合織間に紡錘形細胞が帯状になっている部位，中等量の結合織を伴ないシート状に配列する部位，紡錘形細胞が少数で，巨細胞が多数認められる部位が認められた(写真1, H-E, X850)。紡錘形細胞の核は，一般に卵円形～楕円形，大小不同でクロマチンに乏しく，1個の明瞭な核仁を持っており，核分裂像も頻繁に認められた。細胞質は豊富で，好酸性であった。これら紡錘形細胞がシート状に配列する部位

には，部分的に上皮様細胞に内張りされ，内腔にアルシアンブルー染色陽性の物質をいれた大小の細長い間隙あるいは，割れ目が見られた(写真2, H-E, X1,700)。

巨細胞の核は1～数個で，大型でクロマチンに乏しく，核仁は大型で，細胞質は豊富であったが，全体に紡錘形細胞との共通性があった。これらの巨細胞には変性しているものも認められた。また全体に，銀好性線維の発達が著明であった。

提出標本以外の部位において，腫瘍細胞が骨髓内に浸潤している像，あるいは腫瘍組織と連続している滑膜が，ほぼ正常構造を保っている部位も見られた。

**診断：**新生物の発生部位および滑膜との関係，組織学的に多様な未分化細胞より構成されていること，好銀線維がよく発達していること，滑膜腔様構造がみられることなどから悪性滑膜腫と診断した。

この例では，腫瘍組織に近い滑膜が，比較的正常に構造を保っていることや，腫瘍組織が各種形態をとることから，この腫瘍が滑膜下の未分化間葉系細胞に由来すると考えられた。